

1 学力向上検討委員会構成

学力向上検討委員		
	職名・校務等担当名	氏名
管理職	校長 教頭	田中 敦子 中村 敏恵
学力向上推進員	教諭(教務課長)	一宮 美雪
委員	教諭(小・中学部長) 教諭(高等部長) 教諭(支援課長)	森本 春輝 大谷 教朗 市川 貴雄

2 学力・学習状況における現状分析、目標等

【3つの視点】

- (1) 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2) 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- (3) 主体的に学習に取り組む態度の育成

(高等部) 幼児児童生徒の状況		
よさ	学校生活全般において、生徒それぞれまじめに学習活動に取り組んでいる。 令和6年度は、進路に関する学習や就業体験の経験を通して、自分の課題に気づいたり、目標達成や課題の改善に向けて主体的に取り組んだりする姿が見られた。また、様々な学習や校外での現場実習等の活動を通して、自分の力を知り、自らに合った仕事について考えることができるようになってきている。	課題 障がいや個別のニーズが多様化しており、学習面や生活面において個々に配慮が必要な生徒が多い。 卒業後の進路として一般就労を望む生徒が増えてきているが、コミュニケーション面で課題がある生徒が多い。就労時の職場定着には円滑なコミュニケーションや自分の状況や考えを伝える力は重要な力となる。 そのため、進路先や卒業後の生活を見据えた基本的なコミュニケーションスキル(返事・報告・支援要求等)を身につけることで、他者と適切な関わりができるようになってほしいと考える。
具体的目標(目指す子どもの姿)	成果指標	達成状況
・個々の実態に応じた適切なコミュニケーションスキル(あいさつ、返事、報告、支援要求等)を身につける。	・個別の指導計画において、コミュニケーションに関する学期目標の評価が、「達成」「ほぼ達成」となる割合が、70%以上となる。	・前期は、38個の目標を設定した中で「達成」「ほぼ達成」となった目標は28個(73%)であった。 ・後期は、27個の目標を設定した中で「達成」「ほぼ達成」となった目標は18個(67%)であった。 ・前後期合計で71%であった。
		評価 B
具体的方策(教員の取組)	取り組み指標	取組状況
・個別の指導計画の学期目標にコミュニケーションに関する目標を設定する。 ・個別の指導計画の前期目標・後期目標ケース会において、目標と手だてについての情報を共有する。 ・学部会で指導の進捗状況や指導について検討したり、共通理解を図ったりする。	・個別の指導計画の前期目標もしくは後期目標に、コミュニケーションに関する目標を一人につき1個以上設定する。 ・個別の指導計画の前期目標及び後期目標ケース会を1回ずつ実施する。 ・学部会において、指導の進捗状況や手だて等を共有する時間を、前期及び後期で各1回以上設定する。	・一人1個以上設定し、前後期全体で65個の目標を設定した。 ・5月(前期)・9月(後期)に実施した目標のケース会において、それぞれの生徒の目標を全体で共有した。 ・指導の進行状況については、日々教員間でやりとりをし、全体共有が必要な場合は部会にて取り上げるようにした。9月(前期)・1月(後期)の部会にて達成割合を共有する会を各学期1回ずつ設定した。
* 中間期の見直し 前期の状況を各部会で共有し、継続して実施する。		
達成状況を踏まえた改善事項		
全体の達成状況は約71%と、目標は概ね達成できたものの、数値としてはギリギリの結果となった。しかし不登校傾向や登校が困難となった生徒が数名おり、指導機会を十分に確保できなかった目標も含まれるため、達成率が低く算出されている実態がある。 一方で、継続的に指導を行うことができた目標に限って算出すると、達成率は80%を超えており、指導内容や方法自体は一定の成果を上げていたと考えられる。 今後は、登校状況が不安定な生徒について、段階的で評価しやすい目標設定や評価基準の工夫を行い、実態に即した指導と評価ができるように改善するとともに、指導期間内の目標の変更も視野にいれながら、必要に応じて周知して達成率の向上に取り組んでいきたいと考える。		